

郷辺田遺跡・中ノ台遺跡

—でんちかいほつ—

囑託調査研究員 米倉 貴之

遺跡の位置と周辺環境

今回取り上げる遺跡は、道路建設に先立って平成22年度～平成24年度にかけて発掘調査を実施した富里市大作遺跡・中ノ莖遺跡・郷辺田遺跡・中ノ台遺跡・滝台遺跡の内、奈良・平安時代の集落跡が検出された2遺跡である。遺跡は、印旛沼へ流入する高崎川を南に臨む標高約36～38mを測る右岸の台地上に位置する。遺跡周辺の台地は同河川によって樹枝状に開析され、各遺跡の間には幅約50mほどの谷津が入り込み複雑な地形を呈している。近年、遺跡周辺は東関東自動車道酒々井ICや、高崎川を挟んだ対岸に大型ショッピング施設が建設されるなど開発著しい地域であるが、台地上には畑地、低地には田園風景が広がる緑豊かな自然環境を残す地域でもある。また、富里市は中世から近世にかけて牧経営が行われた地域で、遺跡周辺は近世に整備された佐倉七牧の一つ、内野牧の牧域にあたり、野馬土手等の関連遺構が現在も多く残っている。牧地としての名残は地名にも見られ、新込、古込、大溜袋、小溜袋、古圃、新圃、獅子穴、中木戸、新木戸等が挙げられ、また現在でも市内には多くの牧場や乗馬施設があることもその名残の一つといえるだろう。

周辺の遺跡について

高崎川に面する遺跡周辺の台地上には特に奈良・平安時代の遺跡が多く分布している。本遺跡の西では、当センターによる発掘調査で古墳時代から奈良・平安時代の豊富な遺構・遺物が発見された駒詰遺跡・尾上木見津遺跡や新橋高松遺跡、郷辺田遺跡の西側の谷津を隔てて位置する寺沢遺跡、高崎川南岸の飯積原山遺跡等が挙げられる。以上の遺跡では土師器坏や皿に「奈」「奈野」と記入された墨書土器

が共通して出土しており、8世紀～9世紀にかけて長期間使用された文字であることがわかっている。

一方、東には現在の富里工業団地のある高崎川上流に位置する塚越遺跡があり、仏堂と考えられている四面廂付建物跡が検出した他、住居内から和同開珎が出土している。更に東には8世紀末に須恵器生産を開始した吉川窯跡が位置し、郷辺田遺跡・中ノ台遺跡を含めて周辺の高崎川流域には8世紀後半～9世紀前半の遺跡が密に分布していることがわかる。

郷辺田遺跡の概要

郷辺田遺跡は冒頭の関連5遺跡の中で最も西側に位置し、高崎川に面する台地先端付近に所在する。調査段階で台地南側は細尾根状を呈していたが、明治十五年の参謀本部陸軍部測量局による迅速図と比較すると、現在住宅のある中央部にも台地が広がっており、今の地形は大きく削平されていたことがわかった。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡が密集して検出した他、掘立柱建物群や土坑、また近世牧に関連する土手と堀が検出された。出土遺物は土師器甕・坏・皿、須恵器甕・坏といったごく一般的な物が中心であるが、猿投産灰釉長頸壺や帯金具の蛇尾、鉄製鋤先等も出土している。発見された集落は、出土遺物から8世紀後半～9世紀第2四半期頃の間営まれたものと考えられる。

中ノ台遺跡の概要

中ノ台遺跡は、郷辺田遺跡から東側の谷を隔てたやや奥まった台地上に立地する。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、近世竪穴状遺構の他、郷辺田遺跡同様に近世牧の土手と堀

が検出されている。出土遺物は郷辺田遺跡とほぼ同じ様相を示すが、8世紀第3四半期に比定される猿投産須恵器坏の出土や、「厨」と墨書された土師器皿が出土している。集落の開始時期は郷辺田遺跡よりやや後出となる9世紀前半から営まれたものと思われる。

共通する文字「任」墨書土器

9世紀前半を最盛期とする両遺跡の集落からは、総数81点の文字資料が出土している。中でも墨書土器は土師器坏・皿のみに限定され、点数・文字種類は郷辺田遺跡で49点・約10種類、中ノ台遺跡で23点・約8種類を数える。その中で両遺跡に共通して出土した文字が「任」である。「任」は「任」の異体字(俗字)で、郷辺田遺跡で7点、中ノ台遺跡で4点の土師器坏・皿に記入されていた。この文字は土器の年代から8世紀後半～9世紀第3四半期頃まで使用が認められる。同一の文字は、中ノ台遺跡から谷を2つ隔てた東に位置する滝台遺跡の8世紀後半～9世紀前半に比定される竪穴建物跡より出土した土師器坏にもみられ、「任」使用集落が郷辺田遺跡の東側に展開していることがわかる。また「奈」・「奈野」の墨書土器が多く出土した駒詰遺跡・尾上木見津遺跡や付近の新橋高松遺跡、寺沢遺跡では「任」は出土せず、逆に本遺跡でも「奈」・「野」の墨書はみられないことから、郷辺田遺跡西側の谷を基点として東西で異なる文字を使用するグループに分けられる。異なる台地上に形成された集落間において、同一の文字を使用するだけの何らかの繋がりを持っていたことが推測できる。

県内、特に下総地域で同様に「任」記入墨書土器が出土した主な遺跡は、印西市鳴神山遺跡・同船尾白幡遺跡、我孫子市布佐余間戸遺跡、船橋市印内台遺跡群等が挙げられ、郷辺田・中ノ台遺跡とほぼ同じ9世紀代を中心とした遺構から出土している。上記遺跡は調査によって古代における地方行政の末端組織である郷の中心的集落と考えられ、船尾白幡遺跡は『和名類聚抄』に記載される印旛郡船穂郷、布佐余間戸遺跡は相馬郡布佐郷、印内台遺跡群は隣接す

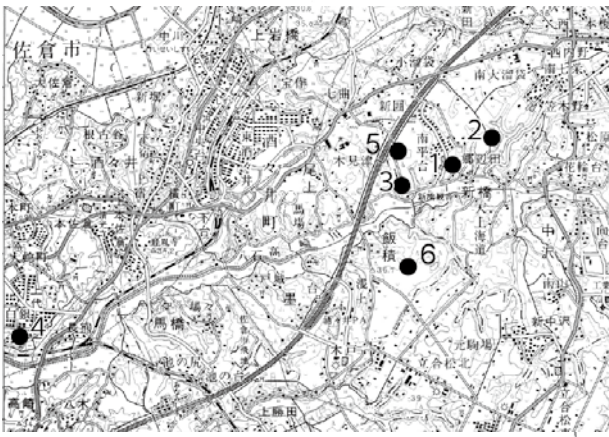
る本郷台遺跡と併せて葛飾郡栗原郷に比定されている。いずれも大型の建物群が整然と立ち並ぶ各地の拠点的な大規模集落である。

集落の位置づけ

本遺跡周辺で中心的大規模集落は高岡大山遺跡が挙げられる。高崎川下流に位置し、古墳時代中期～平安時代まで継続的に集落が営まれ、畿内産緑釉陶器や多数の帯金具等の出土遺物や、8世紀後葉～9世紀前葉に多数の掘立柱建物群が規格性をもって整然と配置され、官衙的機能をもつ流域最大規模の集落遺跡である。

また、郷辺田遺跡の西側約1kmと隣接する駒詰遺跡・尾上木見津遺跡の台地上には古墳時代前期～中期、奈良・平安時代の集落が断続的に営まれ、特に8世紀後半～9世紀前半にかけては、大型の掘立柱建物跡や東国では数例の奈良三彩の二彩埴や初期須恵器樽型甗といった稀有な出土遺物など、中規模な集落に比して特異な様相を示している。

対して郷辺田遺跡と中ノ台遺跡の集落は、柱穴規模にバラつきのある建物跡や、甕や坏といった生活什器を中心とした出土遺物から、前述の2遺跡と比較しても小規模集落といえる。しかしながら、中には8世紀第3四半期に比定された猿投産須恵器や灰釉陶器、鉄製帯金具、「厨」墨書土器等の集落様相とはややかけ離れた遺物が出土しており、このような遺物が本遺跡から出土した背景には、やはり流域最大クラスの集落、高岡大山遺跡の存在は無視できない。本遺跡の集落開始時期である8世紀後半～9世紀前半は、駒詰・尾上木見津遺跡を含め中・小規模集落が周辺に多く出現する時期であり、高岡の建物群が増加する時期でもある。本遺跡の集落が独立した一集団というよりも、高岡の集団による流域上流部の田地開発を担って形成された集落であると考えられる。高岡大山遺跡一帯を推定地とする「長熊郷の辺田」、つまり郷の境を意味する小字が本遺跡の地域に付されたことから推測できる。

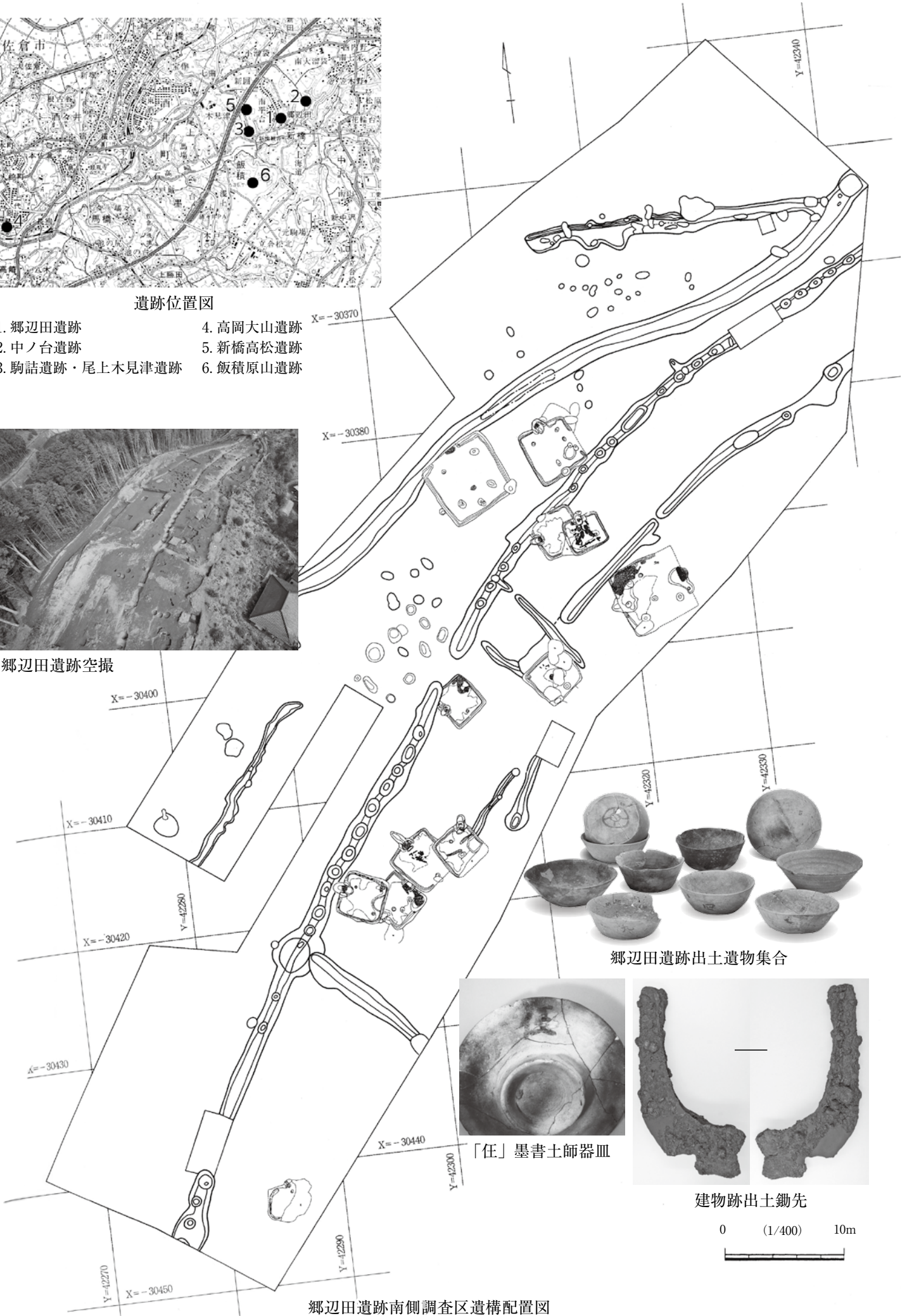


遺跡位置図

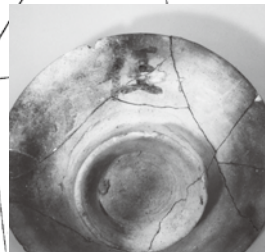
- 1. 郷辺田遺跡
- 2. 中ノ台遺跡
- 3. 駒詰遺跡・尾上木見津遺跡
- 4. 高岡大山遺跡
- 5. 新橋高松遺跡
- 6. 飯積原山遺跡



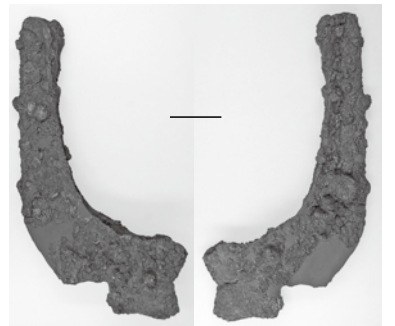
郷辺田遺跡空撮



郷辺田遺跡出土遺物集合



「任」墨書土師器皿



建物跡出土鋤先

0 (1/400) 10m

郷辺田遺跡南側調査区遺構配置図



中ノ台遺跡出土遺物集合



「任」墨書土師器坏



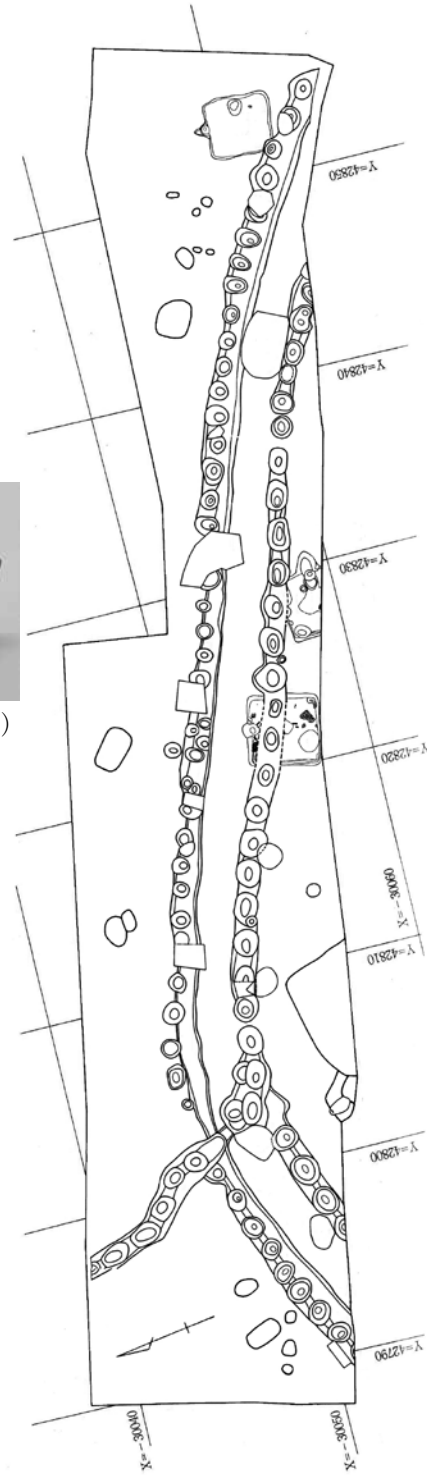
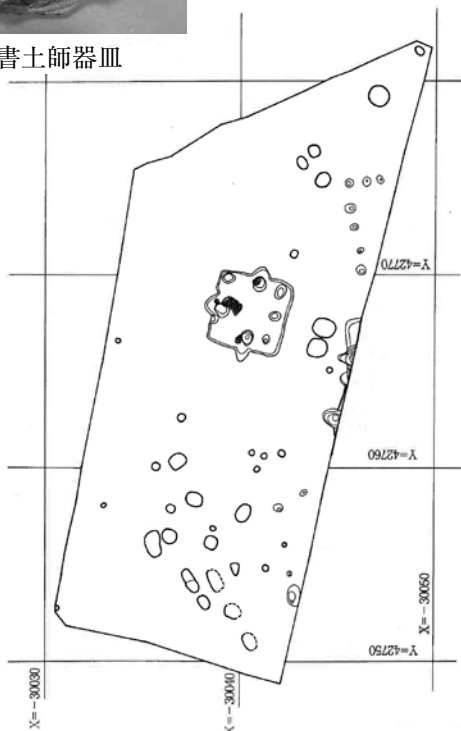
中ノ台遺跡空撮



「厨」墨書土師器皿



猿投産須恵器坏（8世紀中葉）



0 (1/400) 10m

中ノ台遺跡遺構配置図